

Title	『ザ・ボーイズ・ネクスト・ドア』：劇における障害者表象
Author(s)	氏家, 理恵
Citation	聖学院大学論叢, 11(4): 225-238
URL	
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

『ザ・ボーイズ・ネクスト・ドア』

——劇における障害者表象——

氏 家 理 恵

The Boys Next Door

——The Representation of the Handicapped——

Rie UJIIE

Tom Griffin's two-act play *The Boys Next Door* portrays the lives of four mentally handicapped men involved in a program to introduce them into the mainstream of everyday life. They live in a group home sharing an apartment complex under supervision of their counselor. Offering a glimpse into their minds and lives, this play shows prejudice and discrimination against the handicapped.

This study analyzes the representation of the handicapped and examines the problems of welfare for the handicapped which were represented in this play. This paper also deals with the problems of the dramatic presentation of comedy.

トム・グリフィン (Tom Griffin) の二幕劇『ザ・ボーイズ・ネクスト・ドア』(*The Boys Next Door*, 1983年制作, 1986年初演, 以下『ボーイズ』)は、グループホームで生活を共にする4人の障害者たちの物語である。彼らの混乱した日常を描きながら、グリフィンは、障害者への偏見や差別、障害者福祉の問題点を鋭くえぐり出している。本稿では、この作品において障害者の生活がどのように表象されているかを見据えながら、そのなかに瞥見できる差別の構造を分析していきたい。さらに、この劇で指摘されている障害者福祉の問題点を検討したうえで、劇という作品形式における障害者表象の問題について考察してみたい。

『ボーイズ』には多くの障害者たちが登場する。その中心となるのは、共同生活を営む4人の男性であるが、この劇において狂言回しの役割も兼ねている彼らの世話人ジャック・パーマー (Jack Palmer) の言葉を借りれば、彼らは次のような者たちである。

Lucien and Norman are retarded. Arnold is marginal. A depressive by trade, he will fool

Key words; Tom Griffin, *The Boys Next Door*, The American Drama, The Handicapped, Grouphome

you sometimes, but his deck has no face cards. Barry, on the other hand, really doesn't belong here in the first place. He's a grade A schizophrenic with a chronic history of institutions. Loony, teetering on the edge, but clearly resourceful, . . . (17)⁽¹⁾

ルーシェン・P・スミス (Lucien P. Smith) とノーマン・ブランスキー (Norman Bulansky) は知的障害者である。彼らの障害の程度については、観客は彼らの会話や行動から類推するしかないが、ノーマンが社会に出て一般の店で職を得ているのに対し、ルーシェンが施設就労者で生活保護を受けていることを考えると、ルーシェンの方が若干程度が重いようである。アーノルド・ウィギンス (Arnold Wiggins) については、「周縁の (marginal)」という形容詞が使用されている通り、4人の中ではもっとも微妙な位置づけをされている。彼は、いわゆる「健常者」と「障害者」との境界線を行き来している人物であり、厳密に言えば障害者ではないのかもしれない。しかしながら、数々のエピソードからは、自分は「神経質な人間 (a nervous person)」(7) であるという彼の自己認識以上にその程度が甚だしく、精神的にも不安定で、社会に適応しきれていないことは明らかである。バリー・クレンパー (Barry Klemper) の場合は、もう少々事情が深刻である。彼は「施設で治療をいろいろと受けてきた過去を持つ重度の精神分裂病患者」なのだ。『ウォール・ストリート・ジャーナル』を愛読し、「頭脳明晰で機知に富んだ」面がありながら、バリーは常に精神面に不安を抱えているのである。

彼ら4人は、ストーンヘンジ・アパート (the Stonehenge Villa apartment complex) というところで共同生活を営みながら、「社会に十分に適応する (being fully integrated into the community)」(21) 準備をしている。このアパートは、劇中では「グループアパート (a group apartment)」と呼ばれているが、一般にはグループホームといわれる施設である。カリフォルニア州社会福祉省厚生福祉局発行の『一般社会福祉施設認可用件の目標と運営の手引き』1988, 1989年版には、グループホームが次のように定義されている。

「グループホーム」とは、その収容人数を問わず組織だった環境内で、24時間の医療を含まないケアと指導を供し、運営者に雇用されている職員、または雇用職員が加わって運営されている施設をいう⁽²⁾。

主に民間の介護団体・グループによって運営される施設 (家) で、障害者たちはケアや援助を受けながら共同生活し、社会との接点を持ち、あるいは社会へと出ていくのである。

グループホームは施設であると同時に制度でもある。現在、日本でも、地域福祉の拠点としてグループホームの重要性が指摘され、その数が増えつつあるが、その歴史はまだまだ浅い。アメリカでは、1961年にケネディ大統領によって「精神遅滞に関する大統領委員会 (the President's Panel

on Mental Retardation)」が設置され、1962年10月の最終報告により、研究、「一貫性のあるケア」を提供するサービスシステム、精神遅滞の発生予防のための社会活動の3つが必要であると指摘された。さらにケネディは、1963年2月の議会宛特別教書で、精神障害者と精神遅滞者（知的障害者）のケアを結びつけ、問題解決の施策の一つであるプログラムや施設の拡充と改善には、コミュニティを基礎とした施設が望ましいことを強調した。これにより、1963年に「精神遅滞者施設及び地域精神衛生センター建設法（the Mental Retardation Facilities and Community Mental Health Centers Construction Act）」が議会を通過し、連邦全体としての保健政策および社会改革問題となっていく⁽³⁾。この、コミュニティを基礎とした居住施設の設計や運営という要求が、脱施設化（deinstitutionalization）、脱収容化（decarceration）の要求と相まって、知的障害者・精神障害者たちの巨大な州立収容施設からの退所を促進したのである。

このような一連の動きの底辺に流れているのが、ノーマリゼーションの概念である。スウェーデンのニルジェ（B. Nirje）によって広められたこの概念は、「起床、身支度、食事などの毎日の日課の遂行を奨励するだけでなく、家庭から職場や余暇ならびに娯楽の場への移動ができるようにすることで、通常の生活を確保し可能にさせることを意味」⁽⁴⁾している。それに伴い、大規模施設から100名ほどの中間施設、そして15名の小規模施設へと障害者が移動し、1980年代になってからは、4人から6人の規模で援助を受けながら暮らすグループホームが当たり前となったという⁽⁵⁾。さらにいえば、グループホームは施設というより「世話人による日常生活支援を行う」⁽⁶⁾場で、そこで障害者は通常の生活を営み、可能な限り自活できるように促されているのである。

地域福祉の高まりとノーマリゼーションの概念から発達した小規模のグループホームは、1980年以前にはまだまだ少数であった。1983年に創られた『ボーイズ』において、アーノルドが40代、ルーシェンが50代、ノーマンは30前後という年齢設定がされていることから、彼らが、1960年代の過酷な障害者隔離の時代を経験してきたことを想像するに難くはないだろう。また、最年長のルーシェンが黒人という設定になっていることも、彼が、第二次世界大戦前夜から1960年代アメリカ公民権運動の時代を生き、障害者福祉制度の内外で差別を受けてきた可能性を観客に想起させるかもしれない。

前述のように、『ボーイズ』では、一軒家ではなくアパートが舞台となっている。彼ら4人の3階下には耳の聞こえないフレムス夫人（Mrs. Fremus）が住んではいるものの、後に登場する、隣に引っ越してきたウォレン夫人（Mrs. Warren）は健常者であることから、アパートの建物全体がグループホームとして利用されているのではないようである。彼らは、アパートの一世帯分を4人でシェアする形で使用し、リビング・ダイニング・キッチン・バスルームを共有部分とし、あとはそれぞれが個室を持ちプライバシーを保つという形式をとっている。そして、世話人の監督を受けながら、つまり、ある程度の制限は受けながらも、可能な限り自由な生活を営んでいるのである。この劇のオープニングは、それぞれが、買い物から、図書館から、仕事から誰もいないアパートへ

帰宅する場面から始まっているが、それによって観客は、彼らに施設内での自由な行動が認められているばかりでなく、比較的自由な外出も許されているという事実を知る。

彼らは4人とも仕事を持っている。ノーマンはドーナツショップで働き、アーノルドは映画館で清掃係をしている。ルーシェンとバリーは「センター」（おそらくは福祉作業施設）で作業をし、ささやかながらも賃金をもらっている。

Lucien and Barry do assembly work at the sheltered workshop at the Center. The pay is minimal, but since most of their expenses are taken care of, they somehow accumulate money. Both Norman and Arnold do even better from their outside jobs. (43)

彼らの職種はそれぞれ、障害者就労のモデルを表している。武田幸治は障害者の就労を、きちんとした雇用契約に基づく「一般雇用」、何らかの保護的措置が講じられている「保護雇用」、「自営」、そして授産施設等での「福祉就労」、小規模作業所等での「作業活動」の5つの分野に分けている⁽⁷⁾。また、これまでの障害者雇用は、工場のなかで製品を作るといった第二次産業の製造部門での職域が多く、第三次産業での職域の拡大を大きな課題として進展してきている⁽⁸⁾。ノーマンとアーノルドの場合、一般雇用であるのか保護雇用であるのかは明確にはされていないが、その仕事内容や待遇から類推する限り、保護雇用である可能性が高い。ノーマンは、ドーナツショップでドーナツを作る第二次産業従事者であり、アーノルドは映画館という第三次産業の分野で仕事を得ているということになる。ルーシェンとバリーは施設で作業をしているので、おそらくは「作業活動」に従事しているということになるのだろう。そして、彼らは全員、アパートからそれぞれの仕事場へ通勤するという勤務形態をとっているのである。

このように、福祉援助や訓練を受けながらも、彼らは民間のアパートに住み、地域社会において通常の社会生活を営もうとしている。しかし、彼らやグループホームに向ける世間の目は厳しい。『ボーイズ』においては、数人の健常者の台詞やエピソードを通して、障害者に対する偏見が描かれている。なかでも、ウォレン夫人の彼らに対する態度は、普段の生活において障害者と接する機会を持っていない健常者の反応の一例を示している。彼女とノーマンの対話の冒頭部分を引用してみる。

MRS. WARREN. Hello.

NORMAN. (By rote.) Hello. My name is Norman Bulansky. Welcome to my home. Won't you take a seat.

MRS. WARREN. (Studying him curiously.) I really can't stay. My name is Karen Warren. My husband and I just moved in next door a week ago. (23)

この会話の直前にあるト書きで、「彼女は30代のはつらつとした女性である (She is a cheerful woman in her thirties.)」(23) とだけ説明されるウォレン夫人は、「先週、夫婦で隣に引っ越してきたばかり」で、早速、隣人に挨拶をしようと訪ねてくる。応じたノーマンとはもちろん初対面である。おそらく人のよさそうな中年女性として演じられるウォレン夫人は、初対面の訪問者に対する言葉を「(機械的に)」口にするノーマンを「(好奇の目で見つめながら)」、自己紹介や引っ越しの挨拶を述べる前に、「すぐおいとましますから」という言葉を真っ先に口に出してしまうのである。この場面は、役柄やト書きを十分に表現する俳優の演技力も問題になるところだが、ノーマンを見、ノーマンの言葉を聞いた瞬間にウォレン夫人が抱いた感情を類推することは容易であろう。彼女は、「普通」のアパートに「普通」に引っ越しをし、「普通」の人が隣に住んでいるものと思っ
て、「普通」の隣人つき合いを始めるつもりで、「常識」として挨拶をしに来訪した。しかし、応じた男性は「普通」ではなかった。「常識」として教えられた決まり文句を覚えた通りに繰り返し、「普通」ではない対応をする。好奇心はわくが、隣人としてのつき合いはどうしたらよいだろうか。それに対するウォレン夫人の回答は、瞬時に、「関わり合いを避ける」と出たようである。この関係回避の心理は、続く場面において、ノーマンの機械的ではあるが強制的な誘いを断れずに結局ソファに座らされた彼女が、バリーも加わったちぐはぐな歓待に「やけになりながら (A little desperate.)」対応し、その合間にいとまごいの言葉を何度となく挟むことで強調されている。社交的で親切そうな中年女性として登場するウォレン夫人は、障害者とあまり接する機会のない「普通」の人々が突然障害者に出会ったときに感じるかもしれない、障害者に対する好奇心と恐怖心というアンビバレンスを提示しているのである。

障害者の知人であっても、差別意識を持つ者は当然いる。劇の冒頭において、ジャックは買い物から帰ってきたアーノルドに言う。

I've told you over and over not to buy stuff at Livingston's Market. I've told you they take advantage of you. I've told you they . . . tease you. I've done the whole bit, but nothing works. So, we're going to try yet another approach. (14-5)

この台詞からは、アーノルドが「何度も何度も」店員たちにだまされていることがわかる。彼の間違いや精神的混乱はいいように利用され、個数をごまかされたり、品目をごまかされたりして、余計なものを買わされる。施設関係者であるジャックが抗議をしたらしいが、それでも「どうにもならない。」相手が態度を変えない以上、アーノルドが被害を受けないためには、その店で買い物をしないことで対処をしなければならない、つまり、障害者を差別する者から遠ざけるという処置をせざるを得ないのである。これは、差別する健常者の意識改革を断念し、差別からの障害者隔離というきわめて消極的な方法を取ったことを意味する。しかし、現実には、これが根本的な解決策に

はならないことは明らかであるものの、速効性があり、したがってよく取られがちな方法であることは否めないだろう。また、アーノルドの働いている映画館の館主は障害者雇用に理解を示すものの、雇い主の目の届かぬところで、彼は新しく入った同僚に毎日いじめられながら靴磨きをさせられているのである。(25) アーノルドを巡る物語には、自分とは異質な者、自分より弱い者に対する根強い差別意識といじめの構造、それらに対する解決策の貧弱さをかいま見ることができるだろう。

また、ジャックによって紹介される火事騒動のエピソード (26) は、グループホームが施設としてのさまざまな義務を負っており、特になんらかの事件を起こしたときにはその追求が激しいことを物語っている。実際には、この騒ぎはルーシェンが火災報知器を鳴らしただけだったのだが、消防車が何台も駆けつけ、初めはルーシェン、最終的には世話人であるジャックが「とても人の話に耳を貸すような精神状態ではない (He wasn't a listening mood.)」(26) ほど怒った消防署長に油を絞られる。グループホーム内で発生した事態については、運営者が認可機関にその事件の日付や性質、それに対する処置を報告する義務が生じる。入居者の死傷や、虐待、伝染病などであるが、その中には「敷地内もしくは敷地上において起こった火災または爆発」⁽⁹⁾ も含まれている。アパートで火事を起こすこと自体、事実であれば大災害につながる可能性があることは当然であり、事実であっても誤報であっても騒ぎを起こした本人が責められるのは健常者でも同様のはずである。しかし、消防署長の怒りが収まるどころかかえって増した原因は、騒ぎが一般の住居の中にあるグループホームで起こったこと、その騒ぎを起こしたのが知的障害者であったこと、その張本人に何を言っても理解できないにことに対するいらだちと不安に依拠しているのではないだろうか。そこには、障害者が地域社会で社会生活を営むことに対する偏見も存在している。

この劇における最強にして最悪の登場人物は、バリーの父親である。彼は2幕半ばになって初めて登場するが、それまでは息子のバリーを通して最大限に美化されている。「元サンフランシスコ・フォーティーナイナーズの2軍コーチ」(28) にして「ニューヨークヤンキースの三塁コーチ」(24) の有名人。9年間も息子と会ってないのは「忙しいから」(28) で、息子を忘れたわけではない。その証拠に、「クリスマスにはどんなことがあっても、箱入りチョコレートを送ってくれる (But every Christmas, no matter what, he sends me a box of chocolates. Whether he's busy or not. Every Christmas.)」(28) のだ。バリーは、唯一の話し相手である耳の聞こえないフレス夫人に向かって、自慢の父親について話す。彼は自分自身をプロゴルファーだと思いこんでいて、ゴルフウェアを常に着用し、ゴルフの個人レッスンと称して1時間わずかな料金で生徒を募集しては逃げられている。その幻想が、父親にほめられたい、認められたいという願望から来ていることは明らかである。観客は、バリーとフレス夫人の、決して互いに交わることの無い会話を介して息子の父親に対する愛情と畏怖心を知るが、しかし、それは父親に対する計り知れない恐怖心の裏返しでもある。父親が来る日が近づくにつれ、バリーは次第に不安定になっていき、とうとうルーシ

エンに、「パパが怖いんだ (My dad scares me. He scares me something terrible, Lucien. Something terrible.)」(31) とうち明けるまでになる。

バリーの言葉によれば、かつてのスター選手で仕事一筋の人間であるはずの彼の父親は、実際に登場してみると、下品な言葉遣いをする貧しい身なりの粗野な隻腕の中年男にすぎない。(47) 息子への土産も「箱入りのチョコレート」などではなく、バスターミナルで買った安物のハート型チョコレート (48) である。そして、息子の機嫌をとるつもりで一方向的に話しかけ、全く反応を示さない息子にいらだち、罵倒したあげく殴りつけるのである。そして、自分の虐待と、それによって錯乱した息子に困惑しながらそそくさと帰ってしまう。バリーの父親は、彼を愛していないわけではないだろう。しかし、精神障害者の息子を持った父親である彼は、その事実を認めることができず、息子に対してどのように接していいのかわからないのである。

バリーが精神分裂病を発症したのがいつの時期なのかは、はっきり示されない。幼児期に言葉を持たなかったということだけは父親の台詞から明らかになるが、発症あるいは悪化したのは、それまでバリーを見守ってくれていた母親が9年前に亡くなり、困り果てた父親と対峙しなくてはならなくなってしまった前後かもしれない。バリーの精神分裂病の原因が多分に父親との関係にある可能性が、この親子の再会の場面で示唆されている。精神医療の分野では、精神疾患の治療における家族の役割には重要な意味があり、精神障害と家族関係についての研究はアメリカが先駆的であるという。D・D・ジャクソンは、父母の態度研究として、精神分裂病者の父親を、①敗北した父親 (defeated father)、②専制君主的な父親 (autocratic father)、③混乱した父親 (chaotic father) の3型に分類している⁽¹⁰⁾。これを援用すれば、バリーの父親は専制君主的な父親の典型であるといえる。彼は、緊張のあまり何も話せないバリーに対し、怒りをつのらせ発作的に殴りつける。それによってバリーは再び自分の殻の中へ閉じこもっていつてしまうのである。バリーは28歳と厳密に年齢が設定されている (12) が、逆算すれば、最初に施設に入れられたのが19歳となり、彼の分裂病が、母親の死後、父親の影響下において思春期に発病したものであるものと推定するのは困難ではないだろう。

バリーの父親は、自分の息子が精神障害を持っていることに耐えられない。それは、精神障害そのものだけでなく、障害者や障害者施設に対する嫌悪として表現される。父親によって施設に入れられた事実は、バリーのなかでは、次のように歪められている。

My Dad, you know, when Mom died, he was pretty busy with his career. So when he brought me out to the Institutions, he couldn't stay around too long. (42)

事実は、妻の死後すぐ息子を施設に入れたのは、「仕事が忙しい」からではなく、彼を自分の目の届かないところへ隔離しておきたかったからである。「施設に届けると長居もせず」に帰ってしま

い、その後9年の間、面会に一度も来なかったのである。9年間の息子との唯一の繋がり、毎年クリスマスに贈るチョコレート一箱であったが、それもバリーの好物だからではない。バリーは、「おなかをこわしてしまうので、チョコレートが好きだったことはない (I never really liked chocolate very much. I'd get stomachaches from it, you know.)」(43) のだ。彼の父親にとって、チョコレートは、「普通」の父親だったらクリスマスには当然贈るはずであろう、「普通」の愛する息子へのプレゼント、という記号に過ぎないのである。それでもやっと、父親はバリーに会いに来る。民間アパートを利用しているグループホームでさえ、入居者である息子の前で「監獄に近いところ (so close to a prison)」(48) と平気で呼びながらも、近寄ろうとさえ思わない精神病院よりはまだまだだと考えているのである。そして、グループホームへ移ったバリーを、病気が完治したと思って会いに来、思い通りにならない息子を精神的・肉体的に虐待してしまうことによって、逆に彼の病状を悪化させ、施設へ再収容させる結果を招いてしまうのだ。バリーの父親は、障害者を肉親に持ちながら、障害者への接し方を知らず、あるいは接することそのものから逃げている人物である。それは、彼が以前から持っている障害者へ対する差別意識や恐怖心に依拠するのかもしれない。そんな父親の息子に対する対応は、息子の病気発症と再発の原因もしくは遠因となり、医療福祉の治療や福祉従事者の努力を無に帰するのである。

では、福祉従事者であれば、障害者に対する偏見や差別意識はまったくないと言えるのだろうか。この問題におけるジャックの立場は微妙である。30代半ばの彼が、正規の施設職員あるいはソーシャル・ワーカーであるのかどうかは明らかにされていない。彼の仕事は、次のようなものである。

For the past eight months I've been supervising five group apartments of the mentally handicapped. Seventeen adult men. The idea is to introduce them into the mainstream. (12)

「5つのグループアパートで、精神に障害を持つ成人計17人を管理している」ことから、ある程度の責任を持つ地位にいることは確かである。ノーマンたちの世話人兼監督者として、ジャックは彼らのアパートを定期的に訪れ、買い物や料理といった生活技術の支援やアドバイスをしたり、彼らの相談にのったりする。その態度は誠実で、扱い方も公平である。しかし、8ヶ月を経た現在の時点で、ジャックは彼らの行動にいらつき、応対に疲れ、彼らによって「燃え尽くされようとしている (The truth is they're burning me out.)」。(12) けっしていい加減な人物ではないジャックが考えていることは、世話人という現在の仕事は数ある職業の一つにすぎず、その仕事が自己を消耗させるばかりで相手を変えることができない (57) とわかった今、よりよい仕事があれば転職をしたい、ということである。施設の世話人という仕事そのものが彼の天職ではなかったということなのかもしれないが、ジャックによってしばしば言及される、彼の離婚した妻の言葉を無視することはできないだろう。例えば、彼女は偶然ジャックに会った際、彼の車に同乗していたアーノルドを見

て、ジャックに「あなたよく我慢できるわね (How can you stand it?)」(21) と言う。彼女の差別の目は、障害者や障害者施設に対してだけではなく、そこで障害者を相手に働く施設従事者へも向けられている。しかしここでの問題は、ジャック自身が彼女の言葉を非常に意識していることである。彼は、仕事ということもあって普段は障害者に差別なく接してはいても、時として、障害者と関わることによって自分が障害者と同類に見られることを気に病むのである。

『ボーイズ』に盛り込まれているのは、健常者の障害者に対する偏見だけではない。障害者同士における差別やいじめもある。例えば、ルーシェンは、保健衛生局小委員会 (Health and Human Services Subcommittee, 51) でルームメイトについて問われたとき、「ノーマン、あれはドーナツマンさ、(中略) アーノルドはマット、なんか頭がおかしいんだよ (Norman, he be the doughnut man. . . . Arnold's got the rugs. He's like nuts or something.)」(51-2) と説明する。また、アーノルドは福祉センターのダンス・パーティで見かけたヘレン (Helen) がチック症であることをノーマンに教え、二人で彼女のチックのまねをしつこく何度もする。そればかりか、アーノルドは「おまえなんかチックじゃないか (Well you got a tic!)」(33) とヘレン本人に向かって言ってしまうのである。その結果、彼女は車の中に閉じこもって何も話さず、出てこようとしなくなる。前者の例は、個性の差別化と捉えられないこともないだろうが、お互いの障害の程度を比較することによって相手に対して優越感を感じたいという意識は明らかである。後者の場合は、完全に強者による弱者いじめである。障害者差別の行為者は、健常者だけではなく、同じ障害者である場合もありうるという重要な問題がここでは提示されているが、その場合、相手への差別表現や差別行動に対する彼ら自身の意識や理解が足りないことによって、いっそうその激しさが増す危険性も示唆されている。

ここまででは、ストーンヘンジ・アパートに住む4人を中心に、登場人物にどのような障害者像が付与されているか、また、そこにどのような差別の構造が瞥見できるかを考察してきた。しかしまたこの劇では、障害者福祉、とくに精神障害者・知的障害者福祉のあり方に関する問題点も指摘されている。それは、第2幕が始まってまもなく、ジャックが観客に向かって語る台詞にまとめられている。

About death: the residents don't think much about death. Either you got it or you don't. And if you do, wait a while, it'll go away. (Pause.) About money: Lucien and Barry do assembly work at the sheltered workshop at the Center. The pay is minimal, but since most of their expenses are taken care of, they somehow accumulate money. Both Norman and Arnold do even better from their outside jobs. . . . (Pause.) And about sex: the official policy is that sex between residents is to be discouraged. It leads to personal crises and legal entanglements. The unofficial view is more liberal. Many of the women have been

sterilized, and those who might be sexually active are given birth control pills. Pregnancy, for obvious reasons, is a potential disaster. But what amazes me is this: In a society where inexplicable lusts are rampant and expected, why is it that sexual desire among the mentally deficient is viewed as an additional aberration? (43-44)

第一に、死についての問題。「あまり深く考えていない」し、死の概念を「理解しているかどうかさえ」あやふやな障害者に対し、死生観についてどのように教えるか、あるいは教えないかということである。ソーシャルワーカーは、日常生活についての精神的物理的な援助や相談、指導に応じる。社会生活を営むのに必要な常識やしきたりを教え、技術的な訓練を行うこともある。しかし、哲学的・倫理的な思考に関する援助や指導は、必要あるいは可能であるのだろうか。

第二には経済問題である。障害者の経済は、社会保障制度におおいに頼らざるをえない。4人のなかでも、ルーシェンとバリーは、作業施設でわずかな賃金を得ているだけである。それでも現状を維持できれば、「出費は（社会保障で）まかなわれている」ので、「多少のお金はたまる」ことになる。しかし、保障を受けるには厳密な条件があり、そのための審査を受けなければならない。また逆に、現在保障を受けている者でも、社会復帰が可能であると当局から判断されれば、保障は容赦なくうち切られることになる。『ボーイズ』では、ルーシェンが「保健衛生局へ呼び出しを受けていて、生活保護を切られそうになっており (Lucien was informed by the Social Security Administration that his benefits were being cut off.)」(21)、委員会で審問されるというエピソードを通して、この問題の具体例が示されている。

第三に、障害者における性の問題がある。しかしその最も深刻な面、つまり「精神的に欠陥のある者同士のセックス」が認められるかどうかという問題は、ジャックによって観客に説明されはするものの、物語においては、障害者たちが性知識を持っていないという設定によってあっさりと回避される。ノーマンは、20代後半～30代初めと年齢設定がされているシーラ (Sheila) (31) が好きである。彼らは週一回ダンス・パーティで合い、互いに好意を示しあう。ノーマンは、シーラを彼らの家に招きたいとジャックに許可を求めて彼を悩ませるが、その理由は、「僕の『ねぐら』なんだ。彼女に見てもらいたいんだ。バリーが言ってたよ。女の子は『ねぐら』って言われると遊びに来たくなるんだって。どうしてかっていうと・・・よくわからないや (It's my pad. I'd like her to see it. Barry says if you call it a pad, girls will come over because ... I'm not sure.)」(40)というわけである。ノーマンはシーラという異性に好意を持っはいるが、なぜ異性を自分の部屋へ呼ぶのか、なぜ異性の部屋へ行きたいと考えるのか、異性と部屋で二人きりになるということが何を意味するのかを理解していない。それはアーノルドも同様で、彼は、映画館の婦人用トイレにだけ生理用品が備え付けられているのを見つけて、男女差別ではないかと雇い主に抗議する (46)のである。

これらの問題に共通している点は、その問題に対してどこまで施設側・管理者側が関与するかということである。問題そのものは障害者自身に降りかかるが、自分の担当する障害者に何らかの問題が起きたときにどのような処置をするかという判断を下すのは、ジャックに代表されるような、障害者福祉を支えて障害者の援助・指導をする側の人間である。ジャックは、監督する障害者たちのルーティーンを考え、彼らが経済的・社会的に十分な待遇を得よう手配し、彼らの相談にのるばかりでなく、彼らの起こすさまざまな問題に対処しなければならない。世話人であるジャックには、彼らの生活を守る責任と権限がある。現場で、障害者に対等の人間として接していながら、時には「許す」「許さない」という管理者の立場もとらなければならないのである。

グループホームの施設職員は、適切にかつ安全、効果的に職務が果たせるように、基礎栄養学・基礎衛生学・家政学などの知識も必要とされ、入居者のケアと指導にあたり、医療の必要性の観察判断も要求される⁽¹¹⁾。しかし、燃え尽き状態になりかかっているジャックにとって、その仕事量と重責はかなりのストレスとなっている。第1幕冒頭で彼はすでに、「たいてい、みんなの突飛な行動を見て、僕は笑っているんですが、時にはそうそう笑ってられないこともある (Most of the time, I laugh at their escapades. But sometimes the laughter wears thin.)」(12)と告白している。そして、彼のいらいちは、その後も障害者たちとの会話や行動にしばしば現れる。障害を持つ人間を管理する立場となるソーシャルワーカーも、感情的・精神的に不安定になりうる可能性を多分に秘めている同じ人間であることを、ジャックは身をもって示しているのである。

しかも、ジャックは、障害者と接しながら彼らの状態を上司へ報告しなければならない現場の人間である。そして逆に、上からの決定に基づいて障害者たちを扱わなければならない。時に現場担当者は、居住者である障害者と、直接には彼らを知らない上司である運営者・管理者との間で板挟みになることもあるだろう。その典型的な例が、父親との面会に関したバリーに対する処置である。ジャックは、「バリーはそもそもここにいるべきなのかどうか」(17)と彼のアパートへの入居を疑問視していることを観客に告白している。グループホームでは、複数の障害者が「一般社会へ引き合わされること (to introduce them into the mainstream)」(12)を目的として共同生活をする以上、その入居者は社会復帰への準備がある程度整っている必要がある。ジャックは、「重度の精神分裂病」という病歴がバリーにあるからではなく、定期的な観察を通して、彼が医療を受ける必要がまだあるのではないかという判断を下していたのである。しかし、バリーはアパートで生活を続け、彼にトラウマを与えた父親に会ってしまう。ジャックは、精神病院に再び戻されたバリーを見舞った際、その顛末を観客に訴える。

When I found out about Barry's father coming, I went to my boss and asked him to stop it. He agreed. His boss, however, said we shouldn't interfere. He'd met Barry, he said. Barry was stable. 'Christ,' he said, 'not a month ago the two of us had quite a cogent conversa-

tion.’ ‘About What?’ my boss asked. ‘Golf,’ his boss said. (57)

バリーと父親との面会をやめさせたいというジャックの意見を、「彼の上司は受け入れてくれた」のだが、そのまた上司が「我々は干渉すべきではない」と判断したことで、彼らの再会は実現してしまう。たった一度だけ安定した状態のバリーと会い、プロゴルファーであると思いこんでいる彼と「ゴルフの話で盛り上がった」上司は、バリーの状態が父親と会えるくらいに回復しているという判断を下し、父親との面会を許可してしまったのである。これは、現場の意見に対して聞く耳を持たなかった上司の判断ミスであるが、人的ミスの一例とも言えるこの事件は、福祉に携わる者も完全な人間ではなく、福祉施設の運営や障害者管理も人間の判断が介在する以上、常に試行錯誤の状態にあることを如実に示している。『ボーイズ』の舞台上で展開するのは、4人の障害者たちの生活をめぐる物語であるが、そこに浮かび上がる問題点がジャックの視点から指摘されることにより、観客は、障害者と障害者福祉の問題を健常者と障害者の両面から眺めることが可能となるのである。

しかしながら、『ボーイズ』において提示されるさまざまなレベルの問題の解決策が、劇の結末において示唆されることはない。バリーが抜けた後も、残った3人のルーティーンは今まで通り返き、ジャックは転職の希望を変えずに就職活動をした結果、旅行会社に職を見つける。最終場面では、ただ一人ジャックの転職にショックを受けたアーノルドがロシアへ行くと言って家を飛び出す。結局は駅のベンチに座っているところをジャックに見つけられてアパートへと連れ戻される。そこでも、ジャックがアーノルドの混乱を沈めるために転職をあきらめるということは起こらない。ジャックが去った後も、「誰かが来てジャックの代わりになる (Somebody else'll come and take my [Jack's] place)」(62)だけで、3人の生活がこれからも変わることなく続くことが暗示されている。

『ボーイズ』は、場面のそこそこに観客への問いかけを常に含み、彼らの直面している問題が舞台上で解決するものではなく、またその問題が、舞台の延長上にいる観客の問題でもあるということ。これを常に意識させる。この劇には珍しく非現実的なシーンにおいて、ルーシェンが観客に訴える。

I am here to remind the species of the species. I am Lucien Percival Smith. And without me, without my shattered crippled brain, you will never again be frightened by what you might have become. Or indeed, by what your future might make you. (52)

彼ら障害者が存在するのは、健常者に「人間とはどのようなものか思い出させるため」であり、彼らの障害を通して、健常者が「ひょっとすると自分がこうなっていたかもしれない、いや将来そうなるかもしれない、そんな姿に脅かされる」ようにである、というのだ。この言説自体は議論の余

地が残るが、この作品が、障害者問題に関するさまざまな面からの問題提起をオープンエンディングの形で観客に受け渡すことで、今現在もその諸問題が進行形であることを観客に喚起するのである。

『ボーイズ』は、観客を悩ませる。なぜなら、『ボーイズ』はコメディだからである。その笑いの軸は、障害者と健常者あるいは障害者同士における奇妙でちぐはぐな会話や行動にある。よって、登場する障害者、そして障害者に対する差別や偏見は、ステレオタイプ化されたものであることは否めない。彼らの反応のずれは、一般に障害者がとるかもしれないと思われる行動パターンの組み合わせであり、さらにそれは笑いの種として誇張されたりしている。これまで指摘してきたさまざまな問題もまた、ユーモアを交えながら提示され、時には深刻な問題がコミックリリーフとして扱われる。重要であるにも関わらず、障害者同士の性の問題がさらりと描かれていたのも、この劇がコメディであることに起因するのかもしれない。

そして、観客は笑う。なぜなら彼らは劇の観客で、観ている劇がコメディだからである。しかし、心の底から笑い、何も考えずに楽しめるという笑いではない。これは、劇としての出来不出来が原因で起こってくる問題とは異なっている。この劇が、生き生きとした人物描写や、バイタリティあふれる台詞まわしによって、舞台を楽しみ、笑うことに対する観客の心配を吹き飛ばすパワーを持っていることは確かである。しかしそうではあっても、観客は頭の片隅で、知的障害者や精神障害者の言動を笑っていいのだろうか、そこにもしかしたら自分の気づかない差別意識が存在するのではないかと、ときおり自問自答しながら笑うことになる。障害者たちの言動や事件、そして、ジャックが彼らに翻弄されるさまを、観客はどのように受け止めればよいのだろうか。『ボーイズ』は、コメディという枠組みと絶妙な台詞で観客に笑いを要求し、笑うという行為を通して、劇中の障害者差別やいじめの構造へ観客を巻き込み、試すのである。

前出のウォレン夫人の目は、観客の目でもある。ノーマンを見るとき「彼を好奇の目で見つめて (Studying him curiously.)」というウォレン夫人のト書きは、彼女の好奇心や恐怖心であると同時に、観客の好奇心や恐怖心でもある。観客は、舞台上の彼らを見ながら笑い、そして、彼らを好奇の目で見ていることに時として気づき、後ろめたい気持ちになるのである。彼女の登場は2、3分程度、台本にして1ページ強である。登場時間の短さや彼女の行動に見られる偏見からいっても、ウォレン夫人に感情移入をする観客はまずいないだろう。しかし、彼女のような視線で障害者を見、彼女が彼らの奇妙な行動に対してとるような「少々やけになった (A little desperate.)」対応をする可能性のある観客は少なくはないであろう。ウォレン夫人の登場時間の短さは、彼女が障害者と接する時間の短さであり、隣に住んでいてさえも、自分が避けさえすればこの程度のつきあいで済ませられるという時間の長さでもある。

この作品が1983年に制作された時のタイトルは、『ダメージハート & ブロークンフラワー (Damage Hearts & Broken Flowers)』であった。しかし、内容そのままの当初のタイトルではプロ

デュースされず、グリフィン唯一の未上演作品となっていたという¹²⁾。現在の『ボーイズ・ネクスト・ドア』というタイトルに変更して初演相成ったのは1986年のことである。このタイトルに決定した経緯は定かではないが、次のような問いかけが含まれているとは考えられないだろうか。「障害者問題は、障害者自身とその家族、そして福祉関係者だけに関わる問題ではない。障害者はあなたの隣に居るかもしれない。そのときあなたは隣人としてつきあいますか。それともたまたま隣に住んでいるだけの障害者としてつきあいをたちますか。」『ボーイズ』は初演で成功を収めた後、オフ・ブロードウェイでのロングラン作品となり、現在では高校・大学をはじめとするアマチュア劇団のレパトリーの常連ともなっている。1996年にはCBSのスペシャルとしてテレビ放映され、ビデオ化もされた。1999年11月からの再演予定もあり、この作品がこれからますます取り上げられることが期待される作品の一つであるのは、障害者が登場人物であるという話題性ばかりでなく、この劇の持つ喜劇性そのものをもってして観客に挑戦している作品だからである。

注

- (1) Tom Griffin, *The Boys Next Door* (1983; New York: Dramatist's Play Service, 1987). 以下、引用はこの版による。本文中の括弧内にページ数を示す。なお、日本語訳については、鶴澤麻由子・今村由香・鶴山仁訳『ザ・ボーイズ—ストーンヘンジアパートの隣人たち』(文学座上演台本, 1998年)を参照した。台本, 原作の入手に関しては、文学座の鶴山仁氏、最首志麻子氏のご厚意を得たことをここに感謝する。
- (2) 条文第1条 § 80001, (29). カリフォルニア州社会福祉省厚生福祉局『アメリカのグループホームの目標と運営の手引き』(大川信夫訳編, 大揚社, 1995年), 18ページ。ただし、『ボーイズ』の舞台はアメリカ東部である。
- (3) ピーター・L・タイラー, リーランド・V・ベル『精神薄弱者—その歴史』(清水貞夫・津田裕次・中村満紀男監訳, 相川書房), 155-157ページ。
- (4) 同上, 158ページ。
- (5) 富安芳和「アメリカにおけるグループホームについて」(『ザ・ボーイズ—ストーンヘンジアパートの隣人たち』文学座公演プログラム, 1998年)。なお、現在では、自分の家を持ち、そこで援助を受けながら暮らすのがよいとされている。
- (6) 滝沢竹久「精神医療・精神障害者福祉の思想と運動の歩み」(岡上和雄監修『精神障害者の地域福祉』相川書房, 1997年), 30ページ。
- (7) 武田幸治『知的障害者の就労と社会参加』(光生館, 1991年), 198-200ページ。
- (8) 同上, 192-193ページ。
- (9) 「グループホームの目標と運営の手引き」条文第6条 § 80061報告の義務, (b), (1), (H), 『アメリカのグループホームの目標と運営の手引き』, 59ページ。
- (10) 白石大介『精神障害者への偏見とスティグマ—ソーシャルワークリサーチからの報告』(中央法規出版, 1994年), 160ページ。
- (11) 「グループホームの目標と運営の手引き」条文第6条 § 80065職員の要件(f), 『アメリカのグループホームの目標と運営の手引き』, 65-66ページ。
- (12) 鶴澤麻由子「作者について」(『ザ・ボーイズ—ストーンヘンジアパートの隣人たち』文学座公演プログラム, 1998年)。